



## ● 研究ノート 「軽川」地名伝承に挑戦する — 永田方正説を補正する旅 (2)

手稲郷土史研究会 会員 沖田 紘 昭

### 2. 軽川が歴史上現れるのはいつなのか

「そこに暮らし続ける人々が居る所に地名が誕生する」と考えるならば、歴史に当たるしかない。しかも現在の我々には、はっきりした記述の無いものは周りの記録から推理推測してみるしか事実に向ける方法がない。明治維新前史に詳しい『新撰北海道史』（茂内義雄氏蔵書）をお借りし、当たってみる。この本の例言によると、「本巻は大正 7 年 河野常吉編術 北海道史第一巻を基本とし、高倉新一郎が執筆」したものとあり、出版は昭和 12（1937）年である。同誌によれば 鎌倉時代から蝦夷は流人の島であったが、中央政府が蝦夷地に関する知識をはっきり持つようになるのは、松前慶廣が上京し 豊臣秀吉に謁見したとき、天正 18（1590）年 12 月 29 日に始まるという。

手稲に最も近い場所で、早くから歴史上に出てくるのが石狩だが、阿部屋 村山家が松前に渡り、松前藩御用の廻船業を始めたのが 元禄 13（1700）年であり、さらに石狩場所請負が 宝永 3（1706）年である。しかし、それ以前に石狩に入った記録が残っている。「徳川光圀の快拳」として、貞享 4（1687）年、蝦夷地探検船派遣 ※注 3 がこれである。同誌によれば「この時の水戸藩が収集した膨大な資料は中央の学者、為政家の蝦夷に関する知識を豊富にし、後世 水戸藩が蝦夷地開拓論の中心をなすに至った。この大事業の影響下に以降の調査が続くのである」とある。事実、その後、最上徳内は天明 5（1785）年に山口鉄五郎のもと 蝦夷地を調査。東西 蝦夷地を探索し、ロシア人の南下を報告した。近藤重蔵は文化 4（1807）年秋、利尻、天塩を巡察し、石狩川流域も踏査して石狩平野が蝦夷地経営上 枢要なる土地であることなどの意見書を提出した。このときまでは、いずれも手稲を通過した記録は無い。サッポロからバラトへ出て石狩へ至るルートを通っている。

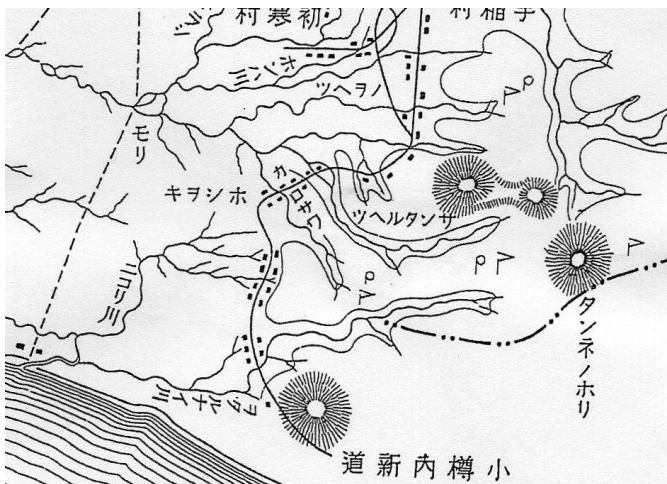
松浦武四郎 ※注 4 の来道は、弘化 2（1845）年、同 3 年、嘉永 2（1849）年、安政 3（1856）年、同 4 年、同 5 年の計 6 回に及んでいる。その中で、はっきりと手稲を歩いたのは最後の安政 5 年である。この話を教えてくださったのは、札幌市博物館活動センターの学芸員 古澤仁氏である。

昨年、同館の展示室で 武四郎の 6 回目の調査から 札幌に焦点を当てて企画展が催された。古澤氏が研究された資料の中から、サッポロから 銭函へ至る部分の『後方羊蹄日誌』と『松浦武四郎紀行集』（吉田武三 編）のコピーをいただくことができた。その資料を要約すれば、「定山溪、真駒内、中島公園を経てハッシャブで旧知のアイヌ、アイクシテの家に宿泊した。翌 14 日、石狩への路を問うと、バラト付近の氷がゆるみ危ないので、真一文字西北に進み、海岸線を石狩に行く道を勧められた。武四郎は、ハッシャブコタンから（追分を通り、手稲を通過し星置を通過して＝筆者注）銭函に入った」とある。しかし、この日誌にも手稲や軽川の記述は全く見当たらないのである。

### 3. 村山家文書の重要性

私が「ガルガワ」を見た一番古い記録は、『札幌区史』（昭和 48 年 1 月 28 日発行）P.456 に所収された 明治 6（1873）年 11 月の地図によってである。この地図では、現在の手稲付近に三つの川があり、「サンタルヘツ」、「ホシヲキ」の間にガルガワのことを指すと思われる「カロサワ」が記されている（P.2 の図参照）。

これまでの歴史探策の中から、「軽川は安政元年から明治維新の間に誕生したのではないか」という確信的な思いが湧いてきた。



『札幌区史』所収「明治六年十一月札幌付近の図」から部分  
「道路河川両側ノ黒点ハ当時現在家屋ノ実数也」との注釈あり

この期間にこの地に人々が集まらざるを得ない事情とは何か。その最も可能性の高い記述は、安政4（1857）年開削の「札幌越新道」である。この新道は、銭函から星置までが小樽内の場所請負人 恵比寿屋半兵衛、星置から島松までが石狩場所請人 阿部屋村山傳次郎、島松から勇払までは勇払の場所請負人 山田屋文右衛門へと3区間に分けて施業命令が出されている。『村山家資料』にもあるようにこの道路建設は安政4年の一年間でいきなり完成したのではなく、安政元年から少しずつ継続されていたようである。

はたして工事の実態はいかなるものであつたのか、考察してみたい。

石狩から工事現場方面を見て、最短距離にあるのが、まさに「軽川」である。そこに現場事務所を開設し、石狩からの指揮を容易ならしめたと考えらるどうか。水の便を考えれば近くにサンタルベツ（三樽別川）があるが、ここには古くからアイヌのコタンがあり、大きな現場事務用地の確保は難しかったであろう。道路建設には土方や大工などの人足が必要で、数カ月はその場で寝食を共にしなければならない。村山家にはたくさんのヤン衆が出稼ぎに来ていて、練漁と鮭漁のない間は働ける。永田方正の『北海道蝦夷語地名解』の説明にある「奥州人」とも一致するのではないか。

私の妄想はどんどん膨らんだ。そこで、旧知の石狩市郷土研究会会長の村山耀一氏（場所請負人・村山傳兵衛の直系10代目）を訪ね、村山家の史資料の中に札幌越新道建設に関するものがないか、尋ねることとした。

相談の後しばらくして一通の書状が届いた。村山家の古文書に当たり調べていただいたところ、筆頭支配人の書き残した記録が出てきたという。それをご丁寧に清書し届けてくださったのである。

「村山傳次郎履歴附属概表」など、どの項目も興味深いものばかりだが、ここでは触れない。「新道」の項を読むと、安政元年の夏から秋にかけて石狩・札幌間、札幌から銭函までの工事が落成したとある。簡略な記述で詳しくはわからないが、村山家は元禄13（1700）年から石狩改革の行われた安政5（1858）年までとすると、ほぼ160年の間繁栄にあった。それをA4版1枚大の表に全て書くことはできない。石狩十三場所の一つをハッシャブ（現 琴似発寒川周辺）に置き、この近辺のアイヌの交易所でもあったろうから、和人の間では村山家が当時の手稲付近について一番詳しくあったことは間違いない。さらに星置や発寒川上流部への伐採が知られており、建設資材の供給地としても手稲山を見ていたことは明らかなのである。今後、もし軽川について何か新しい発見があるとすれば、村山家の古文書からではないかと私は思っている。 <つづく>

※注3 『新撰北海道史』第二巻 P.188 参照。光圀公は英邁にして大志あり、遠洋の探検を志し、南部にて大船を造らせ、南部津軽の二候が是を助け、10年の歳月をかけて出来上がったのが快風丸である。船長十七間、横九間、櫓四十挺、帆柱十八間、帆木綿五百端、傳馬船大小二艘を載せた大船で、この船で貞享4年春、常陸那珂湊を出航、6月松前に至ったが松前藩が許さず帰った。翌元禄元年2月に再び那珂湊を出港、6月に松前着、同月石狩に赴き蝦夷地に関する種々の調査を行った。その中には夷婦を娶って住居している和人数人に会ったという記録もある。船は石狩に留まる事40余日（中略）、帰路台風に遭遇するも遭難を免れ12月27日に帰港した。

※注4 『新撰北海道史』第二巻 P.788 参照。「松浦武四郎は弘化元年蝦夷地踏査を志し、安政3年幕府雇いとなって新道切り開き予定路調査など活躍し、任終わって蝦夷地山川取調べの事を命じられるや安政6年までに本道内部に至るまで限なく踏査し、川流、山脈、地名を詳しく経緯度各一度を1枚とした詳図東西蝦夷山川地理取調べ図28枚を板として奉った」。

## 【つれづれ随想】 「秩父事件」の首謀者が手稲に潜伏していた…?!

明治 17 (1884) 年、埼玉県の秩父地方で、明治政府の重税に困窮した農民らが武装蜂起した「秩父事件」——その首謀者として、欠席裁判で死刑判決を受けた自由民権運動家 井上传蔵が、この手稲の地に 4 年間も潜伏していた事実はほとんど知られていないようだ。警察の追及を逃れるために名を変え、苫小牧、手稲(軽川)、石狩、札幌、北見(野付牛)と転々とするのだが、この間、仲人をしたり、神社の総代になったりなど、地域の奉仕者として慕われていたともいう。とりわけ、俳句に堪能で、現在でも中央俳壇から高く評価されている。

手稲本町に『藤の湯』という老舗の銭湯がある。現在の経営者は 6 代目だが、この初代を村上藤吉といった。明治のはじめに父親と共に京都から小樽へ来たが、商いが不振となり、藤吉は豊平川上流の温泉で湯番になる。そこで軽川に温泉が湧くことを耳にし、明治 5 (1872) 年、『藤の湯』の現在地から 400 メートルほど琴似寄りに『藤廼舎鉱泉』を開いた。かなりの任侠肌だったらしく、軽川では何をすることも藤吉の了解なしでは仕事にならなかったと、地元の古老は語っていたものだ。

ではなぜ、井上传蔵と村上藤吉が繋がるのか。正確にはわかっていないが、「秩父事件」の中心者の一人 田代栄吉は博徒の親分であり、この系列に藤吉がいたことから、伝蔵は軽川に身を寄せたのだろうと推測される。明治 21 (1888) 年、伝蔵が 34 歳の春だったといわれている。藤吉は義侠心に厚く、伝蔵の潜行秘話を打ち明けられて即刻、客人としてもてなすことを決めたと伝わる。以来、伝蔵は、伊藤房次郎の偽名で生涯を送っている。

4 年間 軽川で過ごした後、伝蔵は明治 25 (1892) 年、現在の石狩市親船に転居する。転居にあたり、樽川の畑 48,000 坪(約 16 ヘクタール)を伊藤房次郎の名義で借り、開墾に従事している。事前調査のためだったのか、伝蔵は何度も石狩に出向いていたようだ。魚の本場を訪問するのに、不思議なことに、八幡神社への手土産としてサケ 1 尾を献上したとの記録が残る。石狩で伝蔵は再婚。サケ漁に活気づく地で「小間物・文具商」の看板を掲げて商売し、町の世話役としても活躍する。法律に詳しく筆が立つ伝蔵は、代書業なども引き受けていたようだ。

石狩市本町西で私設資料館『石狩尚古社』を運営する 中島勝久氏は、伝蔵研究の第一人者で、同館には、伝蔵の遺品が数多く残されている。なかでも、俳句結社「尚古社」の一員として活動していた頃の俳句の数々は秀逸で、未発表の作品も眠っているという。号を「柳蛙(りゅうあ)」と言い、近年も新聞記事で紹介されたそうだ。

伝蔵一家はやがて、20 余年を過ごした石狩を離れて札幌に居を移し、さらに、新天地での開拓奨励の話聞いて応じることになった。しかし、病に倒れ、大正 7 (1918) 年、64 歳で他界する。臨終の地は、野付牛一条通(現在の北見市)だった。死の床に就いて、伝蔵は新聞記者を呼び、自分は「秩父事件」の井上传蔵だと明かす。すでに恩赦になっていたが、伝蔵の北海道潜伏は、“秩父事件 巨魁の死”として大きく報じられた。しかし、手稲にいたことは書かれていなかった。

「秩父事件」は、わずか 10 日ほどで鎮圧され、首謀者とされる 7 人に死刑判決(伝蔵を含む 2 人は欠席)。重罪 296 人、軽罪 448 人となって処罰された。新生日本が立ち上がる歴史の一コマに、手稲も少なからず関わっていたことになる。ただ、伝蔵が、なぜ居心地のよかったはずの手稲を離れたのか、その真相はいまだはっきりしていない。なお、この事件を題材とした 神山征二郎監督による映画『草の乱』が、平成 16 (2004) 年に公開されている。

一ノ宮博昭(手稲郷土史研究会 相談役)



井上传蔵ゆかりの品を所蔵する石狩尚古社  
—石狩市 HP より—

※この稿は、『手稲夢しんぶん』第 5 号(平成 16 年 4 月/北海道工業大学内「手稲新聞車」編集・発行)へ寄せた「手稲の記憶～秩父事件の死刑囚 手稲潜伏の深層」をもとに、加筆したものです。

## ◆ なつかし写真帖

## 手稲中央小学校のあやしい(?) 記憶

「香り豊かに 白き花 すゞらん咲ける 学舎の…／  
姿親しく おおらかに 手稲の山は そびえたち…／  
流れさやかに 軽川の ゆく手に見ゆる 日本海…」。  
児童文学者 石森延男の詩による校歌が書かれたこの写真は、昭和36年3月、私が手稲中央小学校を卒業するときに記念としていただいたものです。

ときどき夢に見る木造校舎は 薄暗く、運動場から中庭越しに職員室が覗けました。運動場の壁面には 肋木が連なり、よじ登ったり、ぶら下がったり…。“飛び馬”という遊びもよくしたものです。吹雪のときには地区ごとに分かれ、上級生が盾となってソロソロ集団下校。授業が無くなるので、悪天候の怖さよりも嬉しさのほうがまさりました。朝はサンタルベツ川に架かっていた 隙間から水の流が見える板橋を渡り、牛・馬・綿羊が草を食む草原の小道を抜けると、役場の向こうに学校が見えました。帰り路には 甘い香りのシロツメクサやアカツメグサ、タンポポなどで 花冠や首飾りを編んだりして、道草三昧。校歌に謳われた世界が、あの頃の小学生にはまさに手稲の全てでした！

卒業から60年、今でも夢でオテンバだった私は 校内を走り回っています。誰かを追いかけて…。

乙黒通子 (手稲郷土史研究会 会員)



昭和36年3月 手稲町立手稲中央小学校卒業記念

★ 定例会の開催時刻が変わります 11月より 明年3月までの手稲郷土史研究会の定例会の開催時刻が、午後1時30分からとなります。これは、会員の構成年齢に照らして 冬季の夜間の路面状況などを考慮したものです。一部の会員にはご迷惑をおかけしますが、どうかご理解ください。

ぶれいくたいむ

### ド根性ヒマワリ君

アスファルトを突き破って出てくる スギナやイタドリは ときどきお目に掛かるところですが、私の住む金山では、車道脇に根を張るヒマワリを見ることができます。山側から国道5号へ下りたところのT字路の縁石の隙間で、10月に入った今も頑張っています。



国道脇にすくと！

初めて気付いたのは8月の終り頃だったでしょうか。それから成長を続け、10月7日の撮影時の高さは1.3mくらいでした。よくもまあ、ここまで伸びたものと敬服！ 9月中旬から順次、小ぶりな花を咲かせてきました。不思議なのは「向日葵」と名付けられたにもかかわらず、お日様に背を向けている花のあることです。ひねくれているのか、訳あってのことなのか知る由もありませんが、これもまた面白い…。

「ド根性ヒマワリ君」は、コロナ禍で何かと辛抱続きだった今シーズンの“めっけもん”です。いつまで元気でいてくれるだろうかと、ハラハラしながら 応援しています。

石原重隆 (手稲郷土史研究会 会員)

次回定例会 ⇒ 発表内容「道内随一の霊場『太田神社』にコロナ退散祈願」三國 勲 (手稲郷土史研究会 会員) / 11月10日(水) 13:30~ / 手稲区民センター2階 第4会議室 / 当分のあいだ参加は会員限定とさせていただきます

手稲郷土史研究会会報「郷土史ていね」第164号 令和3年10月13日発行 発行責任者:永井道允(手稲郷土史研究会 会長) 編集:菅原純子・佐々木光男  
❖〒060-0808 札幌市北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ 2階 札幌市民活動サポートセンター レターケースNo. 277 手稲郷土史研究会  
❖メールアドレス kyoudoshi\_teine2005@yahoo.co.jp ❖TEL 090-3381-4994 (担当:林)